



10年住み続ける、わがまち（むら）づくりのお手伝い

# 中山間タイムズ

第5号  
(2月15日) 発行  
富山県  
中山間地域対策課  
お問合せ  
076-444-4578

## 「庄川―三月、旅立ち―」 南砺市 平地域



南砺市役所平市民センターの正面から入り、左側の階段を上った正面の壁に、小さな額に入った、

「庄川―三月、旅立ち―」という題の写真が掲出されています。白黒で見ると古いが、決して鮮明とはいえない写真の中に、雪が残る寒そうな川の中で、陸を離れる川舟に乗る人影と、それを見送る人々の間に別れのテープが繋がっている―そんな瞬間が切り取られています。

この写真は、昭和四十二年三月に曾我忍さんによって撮影されたもので、川中の舟は笹舟と呼ばれ、冬場に雪に閉ざされた五箇山と平野部を結ぶ交通の柱だったそうです。写真が切り取った瞬間は、進学や就職で町へ出ていく中学、高校の卒業生をその親や家族、友人が見送っている様子で、毎年、早春に見られた風景でした。川幅が狭く浅い川岸から小舟に乗り、より大きな船へと乗り継いで下流へと旅立っていったそうですが、吹きつける寒風の中、旅立つ子の名を涙ながらに呼ぶ親の声などが河原から谷間へ響いていたそうです。初めて平地域づくり協議会を訪問するために階段を上り、この写真に気付いた時、強い衝撃を受け、とても感情が揺さぶられました。この写真には、「家族の別れ」、「若人の旅

立ち」、「新しい生活への不安や期待」、「送り出すものの複雑な感情」など、様々なものが切り取られているのではないかと思います。

送られる側も送る側もどちらも寂しいかもしれませんが、春には新たな出会いもあります。この写真のような舟を介した別れはどこにでもあるわけではないと思いますが、今でも春は別れと出会いの季節に変わりありません。また一方で、春は様々な試練の季節でもあります。最近では、県民会館で他県の大学の入学試験が実施されることがあり、会館内で受験する高校生が大勢、緊張した面持ちでエレベータや階段を使って会場へ向かうのを時々見ることがあります。すれ違う高校生に思わず、「大丈夫だ。頑張っただけ結果はついてくる。いや、頑張った以上に結果は出ると信じなさい。」と声をかけたくなります。なにかのハラスメントになるかもしれないし、誤解されたくもないので実際に声はかけられません。が、頑張っしてほしいと思っています。

この写真を撮影された曾我さんは愛媛県出身ですが、写真家を志した二十代前半に仕事で訪れた五箇山に魅せられ、初めての撮影のテーマに五箇山で生活し、作品を撮り続けることを選んだそうです。昭和四十年から四十二年までの約二年半、旧平村の高田俊夫さん宅に滞在し、村の人と様々な交流を持ちながら、当時の村の行事や村人たちの日常を撮影した写真を数多く残しているそうです。

この写真以外にも曾我さんが撮影された写真数点が、南砺市役所平市民センター内に掲出されているほか、近くにあるすけろく（カフェ）内に写真集にした冊子があり、誰でも見ることができます。ご興味のある方には是非、平で見ていただきたいものです。

住民の安否確認に効果発揮 ―災害時の電子回覧板アプリの活用― 南砺市 安居地域

能登半島地震への対応については、日頃からの防災対策の重要性が再認識されているところですが、県内で電子回覧板アプリ等を活用し、速やかに住民の安否確認等を行なった地域も多くありました。

その中でも南砺市安居地域（安居地区協議会）では、実際に電子回覧板アプリ「結ネット」と、それと連携した安否確認機能のある「マゴスピーカー」を活用して、住民の安否確認を実施できたそうです。

**「マゴスピーカー」とは、**  
 スマートフォン等を持たない者向けIP告知端末（各個体に通信機能を内蔵）。  
 「無事」「助けて」という情報発信や、音声で情報を受け取りが可能。



※詳しくはこちら

**「結ネット」とは、**  
 地域組織等の運営を支援する電子回覧アプリの1つ。普段は回覧情報や連絡事項の提供ツールとして、災害時には安否確認ツールとして活用できる。



※詳しくはこちら

安居地域では、令和三年六月から電子回覧板「結ネット」を導入しています。現在の利用者は百六十二人、世帯カバー率は約六割まで上昇しています。利用者の中でも特にデジタルデバイスに弱く、災害時に要支援対象になるかもしれない九世帯に、「結ネット」と連携させた「マゴスピーカー」を令和五年九月に設置しています。その上で、安否確認を含む、防災訓練を毎年実施してきました。



マゴスピーカー設置の様子



防災訓練の様子

※安居地区協議会の「結ネット」と「マゴスピーカー」の実証実験の取組は、県の「中山間地域チャレンジ支援事業（令和五〜七年度）」を活用しています。

地震当日は、次のように対応されたそうです。

□16：10 地震発生

□17：10 地区交流センターに避難所開設

□18：14 「結いネット」を災害時モードに切り替え、《安否確認をお願いします》のメッセージを発信。「マゴスピーカー」設置の9世帯にも同時発信

○安否確認情報の受信

- ・18：24 無事報告：47%  
マゴスピーカー：7/9世帯
- ・18：44 無事報告：63%  
マゴスピーカー：9/9世帯  
※残りの2世帯を見守り担当の方、隣家の方の協力で確認
- ・20：58 最終的な受信状況  
無事報告：67%  
(既読：6%、未読27%)

□20：58 地域内に要支援者がいないと判断。「結いネット」の災害時モードを解除

□21：00 避難者がなかったため、避難所を閉鎖

安居地区協議会事務局長 山本さんからのコメント

電子回覧板アプリを用いて、伝えることができる人には、速やかな情報発信をすることができ、多くの方の無事を確認することができました。特に、マゴスピーカーを設置した全九世帯について、安否確認開始後三十分以内で無事を確認することができました。マゴスピーカーの設置世帯は高齢夫婦のみや高齢者一人暮らしであり、素早く無事を確認することができ、地区として安心することができました。今後、十月の訓練・今回の結果を検証するとともに、結ネットの加入率を高め、災害時の行動について、自主防災会等で見直しをはかっていきたいと考えています。

電子回覧版アプリで、全てを解決できるわけではありませんが、安居地域では災害時の安否確認ツールとしての有効性を実感されたそうです。ご参考としていただければ幸いです。



# 利賀（南砺市）に地元住民によるショップが開店 南砺市 利賀地域

二月十日、南砺市利賀地域に日用品、食料品を扱う「利賀Store」がオープンしました。



店内には、地元の名産品コーナーも

このお店は、もともとあったJAの売店部門が撤退し、地元住民の利便性が低下したため、何とかしようと地元の方々で話し合い開店を決定しました。既存の業者が物流コストの面で二の足を踏む中、それでも必要なものは必要と、地元住民で運営することにしました。

当面は、利賀地域づくり協議会事務局長の笠原哲夫さんが店長、南砺市地域おこし協力隊 利賀地域担当の正木友莉奈さんが唯一のスタッフとなります。土日も営業のため、二人がイベントなどで不在の時、手伝ってくれる人を確保しなければならぬなどの課題も、いずれは専従者を雇用し解決していきたいとのこと。

商品の仕入れなども、現在はスタッフや有志が南砺市内まで買いに行っており、どうしても日持ちのする食品が主となりがちですが、地元の様々な方が自家製のオヤキなどを提供してくれました。これからもニーズに合わせて試行錯誤し拡張していきたいとの意向です。

同時OPENの「利賀の山カフェ」では、コーヒー、お酒などを提供するとともにゲーム機や本を設置し、地域の人の居場所として、また観光客の憩いの場所として発展していければと話していました。

## 利賀Storeスタッフ 正木さんのコメント

今回の震災を通して食糧確保という面で、地域にこういうお店が絶対必要と感じました。また正式オープン前から観光客の方が来てくださるなど土産物店としても十分機能していけると感じています。ぜひお近くに来られ際は、覗いてみてください。



名物(?) オロロのバッジも販売

**【営業時間】**  
 7時30分から18時30分まで (平日)  
 10時から15時まで (土・日・祝)  
**【お問い合わせ先】**  
 利賀地域づくり協議会  
 TEL:0763-68-2016

# 追記《「永久的警告」と書かれた額》にまつわる縁 黒部市 東布施地区



十月号では、明治四十五年七月の大洪水の後、当時尾山小学校校長であった谷島清六さんが村の将来の子孫に伝え、このような惨事を再び招かないように記録した書が、黒部市東布施公民館の一階ロビーに額で掲出されていることに注目いたしました。

その際、東布施地区自治振興会長の谷島傳俊さんから、この額にまつわる旧東布施村から出られた方々の縁についてお話を伺いましたので追記します。

ここ十年間に数度という頻度ですが、「私の祖先が東布施村出身なのですが、地域のことなどについてお話を聞きたい。」という問い合わせがあり、その都度、会長や家系のわかる関係の方々がご対応されているそうです。

谷島会長が縁を感じたとおっしゃるのは、昨年の五月十八日に全く別々のご家族が二組、先祖のを知りたいと東布施公民館をご訪問されるといふ不思議なことがあったことだそうです。

同じ日に数時間の差で公民館を訪問し、額に入った書を眺められた二組のご家族は、一組が遙々北海道から、もう一組は神奈川からお越しになったそうで、かつての大洪水の後に新天地を求めた方(注)や、開拓団に加わった方の子孫らしいということです。

それぞれ事情は異なるものの、東布施村をルーツとする祖先に思いをはせ、東布施はどんなところで、そして先祖はどのような様子

だったのか知りたいと思い、実際に東布施を訪ねてきました。それそれ念願がかなって喜んでお帰りになり、その後もその方々とは手紙のやり取りをされたそうです。

書をしたためた谷島校長とご家族のその後についても、谷島会長からお聞きしました。後に谷島校長は満州へ渡られ、終戦までを当地で過ごされたそうです。帰国後、五人のお子様たちは東京や北海道へ移られて人生を送られたようですが、ご次男については、金沢大学医学部で教授を務められたと伝えられています。

(注) 明治四十五年の大洪水の後に、少なくとも九十戸以上が旧東布施村を離れたと伝わっています。



黒部市東布施公民館を背景に、谷島自治振興会長（中央右）と北海道から来訪された村田さんご一行

